

小中一貫義務教育学校に夢をのせて

大澤 紀子

1 はじめに

阿蘇・米本地域の小中学校の統合については2015年3月に学校適正配置検討委員会から答申が出され、その後幾度となく行政の立場から、また地域の立場からと様々な話し合いが繰り返されてきました。地域コミュニティの中心として地域とともに歩む学校が、義務教育期9年間の子供たちを丸ごと教育していくことの教育効果は絶大なものがあると私は考えています。教育、つまり人づくりは間違いなく日本の社会を形成していくための骨格となるものです。この緑豊かでのびやかな環境のもと、どんな人をも受け入れ、優しさにあふれる子供たちが世の中の一翼で活躍できる日を夢見て、義務教育学校の設立に向けて奮闘した一部を記したいと思います。

2 目指す教育観

阿蘇中学校には目指す教育観「阿蘇中八策」というものがあります。どの教職員もこの8つの意識をもって子供たちの教育に当たろうというもので、大切にしてきた考え方です。中でも次の3つの観点は私の学校経営の基盤となるものでした。

＜「叱る」よりも理解する＞

- ・生徒を丸ごと受け入れる。生徒指導＝生徒理解と捉える。
失敗もする、遅刻もする、忘れ物もする、すべてを受け入れる。

＜「きく」を基盤にした関係づくり＞

- ・「聞く」「聴く」「訊く」を大切にする。
生徒、保護者が何を訴えているか、誠実に話を聴き、一緒に考える。

＜同僚性の構築＞

- ・同僚性を築くには、お互いに「尊敬」し「信頼」し「思いやり」の心を持つことが大切であり、チーム阿蘇の原点は同僚性の構築である。

チームで知力を巡らせれば、何でも解決できる。本気でやれば誰かが助けてくれる。阿蘇中学校の先生方は決して声を荒げて子供を怒ったりしません。目指す教育観にあるように、子供たちの現象には何か背景（理由）がある、と考えて実に粘り強く、丁寧に子供たちを見てくれました。その成果は、先生たちと子供たちの強い信頼関係に現れています。どんな子供たちも安心して学校に通える、安心して人と関わるができる、義務教育期の子供たちがそんな資質を養うことができる学校づくりがとても大切なのではないかと思います。

3 多様性を認め合う関係づくり

阿蘇中学校の廊下掲示の中に、阿蘇小学校の耐震工事の年、2学期の間だけ阿蘇中学校の校舎で同居していた時の写真が飾られています。小さな小学生が嬉しそうに大きな中学生と一緒に遊んでいる写真。その笑顔が本当に輝いていて、この写真を見るたびに小学生と中学生と一緒に暮らしていくことの可能性に夢が膨らみました。いろいろと不安に思われる声も聞きますが、9年間のさまざまな成長過程の子供たちが一緒に生活していく中で、学校として意図的に、また子供たちなりに工夫しながら学び合う関係性を創っていけることに義務教育学校の大きな価値があるように思います。

また、阿蘇中学校は多様性を認め合う資質を伸ばしていくために、大きな財産があります。その一つは、知的および情緒の特別支援学級があることです。教科の授業の中で、また、学年・学校行事の中で、特別支援学級の子供たちの頑張りに誰もが刺激を受け、お互いに助け合う実に温かな光景をよく目にすることができました。中学3年生の長距離走の授業で、応援の声かけが響く中、最後まで粘り強く走っていた特別支援学級の男子生徒に自然に寄り添い、伴奏していた女子生徒の姿を忘れることができません。

阿蘇中学校の生徒の家庭生活・家庭環境は実に多様なものがあります。国籍一つをとっても家族がさまざまな国から日本に来て生活をしている、そんな子供たちが各学級に複数名在籍しています。見た目も育ってきた文化や言葉、保護者の考え方もさまざまな子供たちが、日常生活の中で普通に一緒に暮らしている、いろいろな人がいることは当たり前のことで、何の違和感もない、こんな風土が阿蘇中学校にはあります。

2020年度はそんなかけがえのない世界の文化を共有する場を作る目的で、スリランカからの転入生に、スリランカのさまざまな文化について、学年の子供たちにプレゼンをしてもらいました。またその延長として、スリランカの母国語であるシンハラ文字を学んで、彼女にお礼の一言をカードにして渡す取り組みに挑戦しました。子供たちは日本と違うスリランカの文化に大いに

関心を寄せるとともに、タブレットを駆使しながら楽しくシンハラ語を勉強していました。また、イタリアと日本の両国の学校で勉強することに挑戦している1年生にも、イタリアの日常やイタリア語を紹介してもらった場を作ってみました。子供たちの柔らかい頭と心は、自分とは違う文化や考え方に大いに関心を持ち、受け止め、共通点や差異を認めながらも共に助け合い、支え合いながら生きていこうと働きます。自分とは背景も環境も考え方も違ういろいろな人が一緒にいるからこそ、豊かに生きていける、という素地が育つことの大切さを実感させてもらった実践でした。



(英語によるスリランカ文化プレゼン)



(シンハラ語で作文挑戦)

4 学び合い，支え合い，認め合い・・・学び合える関係づくり

2年前，阿蘇中に着任してまず驚いたことは，外から公開研修会で訪れた時と同じ授業風景が，いつ，どこの学級を見に行っても展開されているということでした。（入学したての1年生は別として）子供たちは話したり，話し合ったり，説明したり，そして仲間や先生の話に聞き入ったり，時にはひたすらノートに書き綴ったりと，常に授業中に課題となっていることに対して考えている姿が教室一杯に広がっていました。

わからないことはちゃんと周りのみんなが，先生が教えてくれる，一緒に考えてくれる，一人も取り残さない，という信頼感が子供たちの中に定着しているのだ，ということの子供の姿から強く感じ取ることができました。



(3年生学び合い授業)

授業はわからないことを解決してもらえる場である，と阿蘇中の子供たちは誰もが思っています。だから，寝ている子供なんていません。まさに，主体的で対話的な授業が繰り広げられています。これを，深い学びにしていくためには，教師の力量が問われます。教科の専門性を高め，学びを子供たちのものにしていくために，教師は常に学ばなければなりません。子供たちに教科の魅力を味わわせ，その面白さがどうした



(コロナ禍での外開き班学習)

ら伝わるのか，授業づくりの力量を高めるためには，たくさん授業づくりを挑戦して，仲間に見てもらうことが一番だと思います。他教科の授業であっても，他教科だからこそ新しく発見できることはいっぱいあります。同僚としてお互いに学び合い高め合う風土が，阿蘇中の職員による模擬授業や授業研修会には根づいていると思います。日頃の職員室での会話の中にもまた，仲間の実践の工夫を吸収しようとする先生方の姿を日々，見るすることができました。



(教師の学び合い：模擬授業)

職員同士が学び合える（信頼し合う），そして子供と教師が学び合える（信頼し合う），最終的に子供同士が学び合える（信頼し合う）関係が構築され，研修の実践が積み重ねられることこそが子供たちの学力の向上につながり，このことが義務教育9年間を通して大きく生きる力を育むことにつながるのではないかと考えます。

5 新しい学校に向かって

私は平成の初め、まだまだ中学校が荒れている時代に1回目の阿蘇中学校に赴任しました。30年経って2回目の阿蘇中学校に戻ってくると、まるで別の学校のような穏やかで優しい子供たちが、何事にも一生懸命に力を尽くす学校になっています。そして、来年いよいよ八千代初の小中一貫義務教育学校としてのスタートをきることになりますが、昔も今も変わらないのは、地域の方々の、学校や子供たちに対する熱い想いです。学校に子供も大人もおじいちゃんもおばあちゃんも、いろいろな形で集う、教育を核としながら様々な地域コミュニティが構築される地域活性化の希望となる新しい学校が発展していくことを夢見て、今回の報告は終えようと思います。